

戦後混乱期横浜の都市生活誌

——横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から（４・終）昭和21～26年

吉崎 雅規

● はじめに

本連載は横浜市磯子区の時計店に勤めた下平政熙氏の日記をもとに、昭和戦前期から戦後混乱期にかけての庶民の都市生活の実態を復元することを目的とする。くわえて、日記の内容から当該期の都市横浜の世相や情景をひとつの地域資料として紹介することも意図している。なお、本連載では「個人史」の観点から下平政熙という個人を視座に据えて、政熙の人生と社会との関わり、さらにその人生と社会の変化にも留意しながら叙述を進めていきたい¹。

本稿が依拠する日記とその筆者については本連載第一回で解説をおこなっているが、改めて簡単に紹介しておく。

下平政熙は大正六年（一九一七）三月十一日、長野県下伊那郡上郷村南条（現飯田市上郷飯沼）に生まれた。昭和五年（一九三〇）一月二十日、横浜市磯子区西根岸町（現磯子区下町）の谷崎時計店に奉公するため来浜し、戦前期は同店に店員として勤める。昭和十九年三月五日に出征。同二十一年五月十七日、佐世保に復員し谷崎時計店に復職。二十三年一月二十日、磯子区滝頭町字浜（現磯子区中浜町）で下平時計店として独立する。その後は時計店主として終生をこの地で暮らし、平成六年（一九九四）一月十日に死去した。

日記は昭和五年から平成六年まで全六十六冊が残されており、出征中の昭和二十年をのぞき、原則として一年に一冊ずつ記されている。日記は政熙の死後、長男の下平修嗣氏が所蔵していたが、平成二十七年に横浜都市発展記念館に寄贈された。本日記をもとに、筆者は「時計屋さんの昭和日記——一青年のみた戦中戦後の横浜」という特別展を平成二十七年に横浜都市発展記念館で実施し、その内容を同タイトルの展示関連書籍で報告した²。

本連載第一回では昭和五年から十一年、第二回では同十二年から十四年、第三回では同十五年から十九年の日記の記述より、昭和戦前・戦中期横浜の都市生活の諸相を叙述してきた³。連載第四回（最終回）の本稿では、昭和二十一年から二十六年の政熙の日記と関連史料から、戦後混乱期の横浜の都市生活について主に検討をおこないたい。

なお、史料（日記等）の引用にあたっては句読点を付加し、吉崎の訂正・補足は〔 〕で示した。（ ）は史料原文に記されているものである。また本稿では原則として敬称を省略した。

1 復員

佐世保への復員

昭和二十一年五月十七日、政熙は出征してい

1 「個人史」「生活史」についての本稿筆者の捉え方については、本連載第一回の吉崎雅規「昭和戦前期横浜の都市生活誌——横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から（1）」『横浜都市発展記念館紀要』No.13、二〇一七年、を参照のこと。

2 横浜都市発展記念館編『時計屋さんの昭和日記——一青年のみた戦中戦後の横浜』公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団、二〇一五年

3 前掲吉崎雅規「昭和戦前期横浜の都市生活誌」、同「昭和戦中期横浜の都市生活誌（上）——横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から（2）昭和12～14年」『横浜都市発展記念館紀要』No.14、二〇一八年。同「昭和戦中期横浜の都市生活誌（下）——横浜市磯子区の下平政熙氏の日記から（3）昭和15～19年」『横浜都市発展記念館紀要』No.15、二〇一九年

た中国から佐世保に復員した。復員時に交付された「従軍証明書」⁴によると、政熙は「支那派遣 電信第十連隊」に所属する上等兵（帰国時に進級）であった。政熙の従軍中の日記は残っておらず出征中の詳しい足取りは不明だが、「北支の戦線を駆廻つた軍人として満三年間働き」⁵と回想ノートにあること、また「従軍証明書」に、昭和十九年八月二十四日河南省開封で赤痢に罹患したと記録されることから、おもに中国北部を転戦していたようである。なお、復員前後につけたとみられるメモ（横浜市技能文化会館蔵）には「中華民国河南省鄭県鄭州」「四月二十五日七里口発」「〃二十七日鄭州発」という文言があり⁶、復員直前は河南省鄭州にいたことが推測される。

政熙の日記は、昭和十九年の出征時までつけていた日記帳（主婦之友社編「家庭生活日記」）を流用して再開された。政熙は昭和十九年三月五日に出征しているから、それ以降の日記帳は空白のまま残されていたのである。復員した五月十七日の記入欄には、「五日も滞つて居た海防艦37号に別れをつけてだるま船の人となる。上陸。米軍の人員点検・DDT及コレラ等の予防注射・旅具検査等あわたゞしい事が続く。六キロ行軍して（第二佐世保）元海兵団へ入る。色々と支給された。泊る」と、復員当日の事柄が簡潔に記される。もっとも、政熙は本日記帳を戦地に携帯していなかったから、この記述は佐世保到着と同時期に記されたものではない。むしろ前出のメモ⁷は、日記よりも復員時の情

景が詳しい。

五月十七日

海防艦37号に便乗し二日間の航海の後、佐世保港内に五日間の停泊から懐しの祖国へ上陸、第一步を印した。米軍の人員点呼、コレラ・パラチフス一の三種予防注射を左右の手に一度にやられた。それより百名宛警官附で七軒の行軍をする。日本の子供を久しぶりで見た。皆可愛かった（遠足・・・）。三四回休けいした。荷物が重かつたが元気のよい事。祖国復興への一歩―だ。海兵団入口で携行具検査も無事に済み、宿舎に宛てられて入る。中食・夕食の給与をうく（玄米）。人員点呼の後、毛布に包まれ眠りに就く。

記された用紙の性質（メモ用紙）から考えて、このメモは日記帳の記述よりも、より五月十七日に近い時点で書かれたものであろう。政熙の喜びが伝わる叙述であるが、復員時の手続きが知れる歴史資料としても興味深い。

政熙が帰還した佐世保は海軍鎮守府が置かれていた軍港都市であり、港湾施設が充実をみていた。そのため昭和二十年十月十五日、海外から復員・引揚げてくる者たち⁸の上陸地に選定され、大陸に近いという地理的条件もあいまって、博多とならんで多くの帰還者を受け入れることになった。収容所が閉鎖される昭和二十五年三月までの総帰還者数は一三九万一六四六人で全国二位。一位の博多よりわずかに七六三人

4 「従軍証明書」昭和二十一年五月十七日（3クリアファイル1）

5 「（戦前・戦後感慨ノート）」（4-その他5-1）。「回顧」

6 「修繕台帳」横浜市技能文化会館蔵請求記号3284。本資料はメモ用紙（「覚書」）を綴じたもので、主には昭和二十一年六月八日以降に購入した時計の部品を書き上げた「台帳」であるが、最初の数丁に復員前後の出来事が鉛筆でメモされている。同館は下平政熙の時計修繕に関わる道具類等を所蔵する。

7 「修繕台帳」横浜市技能文化会館蔵請求記号3284

8 なお、元々「復員」とは海外で終戦を迎えた軍人・軍属が帰国して任務を解かれることをいい、「引揚げ」とは海外にあった民間人が居住地の諸権利を放棄して日本に帰還することを指す。当初、帰還船の入港地でおこなわれた復員・引揚げの受入業務は、陸軍将兵、海軍将兵、民間人ごとに別々におこなわれていた。しかし昭和二十年十一月、厚生省下にそれらの統括機関として地方引揚げ援護局が設置されたことにより、「引揚げ」業務の対象に「復員（者）」を含めるようになり、「引揚げ」は戦地から日本に帰還する動きをあらわす広義の言葉になった。佐世保市史編さん委員会編『佐世保市史』軍港史編 下巻、佐世保市、二〇〇三年、三四七～三四八頁

少ないだけである。なお、政熙が帰還した昭和二十一年五月の佐世保入港隻数は九十五隻、帰還者数は十万一四一人で、この時期佐世保は帰還のピークを迎えつつあった⁹。

佐世保港の主要な埠頭はアメリカ軍が使用していたため、引揚げ船の停泊地には佐世保駅から直線距離で七キロ離れた恵比須湾が選ばれ、湾内の浦頭が上陸地に指定された。浦頭には海軍病院分院の消毒所があり、ここが帰還者向けの検疫所（浦頭検疫所）となった。政熙の日記にも見えるように、DDT消毒、コレラ・パラチフスなど各種予防接種が同所でおこなわれたのである。検疫後、帰還者は宿泊所にあてられた元針尾海兵団の施設まで、約七キロの道のりを徒歩で移動した。海兵団施設の敷地面積は二十万坪、十二の兵舎の収容能力は二万人という広大な施設で、この存在も佐世保が上陸地に選ばれた理由のひとつであった。

帰郷

翌五月十八日。各種の支給物を受け取ったあと、「待ちに待った」復員式が行われた。「やかましや」で知られる電信第十連隊長の並〔波〕木周治も、「もうふだんにやかましく云つてあるから何も云わぬ」と言って復員式ではにこにこしていた。政熙は上等兵に進級し、「善行証書」をもらった。引揚者援護団主催の「演芸大会」が開かれ、政熙たちは「今までの緊張」をようやく解いた。「長野班」はまとまって戦友に挨拶まわりをした。

五月十九日。いよいよ佐世保を出発して帰郷する。政熙は四時に起床。「長野班」は他班の戦友に先がけて出発した。八時四十分、南風崎駅を発車。「沿道の人々は万歳を昌〔唱〕へて我々を迎えて下さった。思つて居るとはまるでちがふ祖国の温い手をさしのべて下さり、湯茶の接待、新聞を下さった喜〔嬉〕しさは忘れられな

い」。針尾付近の江上、崎針尾の婦人会は湯茶の提供などをおこなって帰還者を励ましたというが、このことは政熙など帰還者の心を潤した。

下関で乗り換えた政熙は、翌二十日に神戸を通過する。三ノ宮は「変りはて」「風景は昔の影はなし」という状況だった。名古屋で多くの戦友が下車したが、政熙は東海道線に乗り続けて豊橋で飯田線に乗り換える。そして午後八時半頃、政熙はようやく上郷駅へ到着した。「まつくらなれど片時として忘れる事の出来ない故郷へ着いたのだ。重い手製のリュックサックも何のその」。政熙は南条で親戚と久しぶりの対面を果たした。

翌五月二十一日、政熙は弟財作の墓参りをした。「立派に村葬して頂いた様があり――と分る」。昭和十六年に海軍に志願した財作は昭和十九年七月九日、サイパンで戦死していたのである。午後から南条八幡社に参拝。「何かにつけて神を念じて」いた政熙は、神のご加護で無事復員できたことを報告した。

その後、政熙は親戚や旧友と久しぶりに会い、あるいは「蚕の桑つみ・桑分配・アミツリ・水汲み」（五月三十日）等、祖母の養蚕を手伝いながら、久しぶりの故郷で疲労をとった。だが、大古洞下伊那郷開拓団に参加して昭和十五年に満洲・大古洞（現黒竜江省）に渡った家族（政熙の父準太郎、母むつよ、弟（六男）忠孝、八男博照、三女日巷、四女日俊）の消息は不明なままであった。

六月二日、政熙は横浜に向けて故郷を発った。「懐しの故郷には永く居るを許され□〔ぬ〕自分だ」とあるように、肉親がいない上郷村に政熙は長く滞在することができなかった。政熙は「両親兄弟もどうか帰つてくれ」と念じつつ、「今度は家の復興のため全力を注がん」と誓った。

9 『佐世保市史』軍港史編 下巻、三五七頁・三六一頁。以下の記述も同書による。

占領下の横浜

六月三日、政熙は八王子で横浜線に乗り換え東神奈川を經由して、「懐しの」桜木町駅へ着いた。駅周辺は「変りはてた焼野原」となっており、「目抜き」の所に米軍が進駐して「自動車は数知れず」走り回っていた。政熙には「機械化された米軍」が「飛廻つて居る」と映った。

昭和二十年八月十四日の御前会議で政府はポツダム宣言の最終的受諾を決定。連合国側に通告がなされた。八月三十日、連合国最高司令官マッカーサー元帥が厚木に到着、横浜のホテル・ニューグランドに入った。マッカーサーはその後間もなく東京の米太平洋陸軍総司令部に移るが、米軍は関内の主要部や横浜港の港湾施設を接收。米第八軍司令部が設置された横浜は、占領軍の軍事的拠点となった。昭和二十年末現在、横浜には占領軍全体の約四分の一にあたる九万四〇九四人の将兵が進駐していたのである¹⁰。

政熙は桜木町から西根岸の谷崎時計店にもどったが、店舗はひとに貸していたようで奥より中に入った。主人・谷崎千久次の妻（まつ）は入院しており、見舞いがてら復員の報告をおこない、その後（磯子）区役所で復員の手続きをとった。

翌日、政熙は「隣組へ挨拶」にまわり、「三ヶ年の間にずい分変つた」ことを感じた。そして、「敗戦国日本を建直すため、家を興す為に」仕事に邁進することを誓う。日記にはこの時期の政熙の感慨はさほどくわしく記されないが、後年（昭和二十四年六月十五日）の回想には次のようにある。

復員して二日目に腕時計修理して米五合戴いたのを手初めに家の復興に心血を汁〔注〕いだ。故郷をあとに横浜へ来て主人の許で再び商売に技術に力を入れた。そこで材料を仕入

れて仕事の基礎をきめてから、家を建直すには先づ両親及弟妹の引揚を招置出来る事に目標をきめて一心に働いた。¹¹

時計修繕の仕事にもどった政熙は、材料の仕入れなどで市内をまわる折に、戦争の爪痕や進駐軍を見た。「自転車で見えた横浜は中村町、堀の内から蒔田、宮元町一帯は焼け」、所々に「金庫が残つて居るのもあわれなり」（六月八日）。「夕方海岸へ散歩す。しつ走するジープを見送る気持は・・・」（七月十四日）、「夕方本牧方面見学。焼け跡にバラック建と進駐軍の立派な家屋を見る」（昭和二十二年二月四日）。東京も焼野原だった。世田谷の親戚を訪れた政熙は、「焼野原と化した帝都。沢山の自動車並ぶ米軍を見て帰る」（六月十五日）と記したのである。

2 満洲の家族

弟博照の帰国と慰霊祭

昭和二十一年十一月十一日、弟の下平博照が満洲より故郷上郷村に戻ったとの通知があった。昭和六年生まれの博照は十五歳である。翌十二日の夕方、妹の久保が政熙のもとを訪れ、故郷からの電話で聞いたという両親と妹の死をつたえた。政熙はすぐさま切符の手配をし、翌朝八時に出発。新宿から中央線で信州に向かい夜十時に上郷村南条に到着、「衰弱」していた博照と久しぶりの再会を果たした。十五日、政熙は博照とともに「死亡証明書」を取りに「地方事ム所」へ行き、「遺骨箱（慰霊祭）と博〔照〕の衣類の件御願ひ」した。十九日には家族の遺留品を、慰霊祭が実施される予定の柏心寺（現飯田市箕瀬）に届けた。まだみずからの身の回りのことのできない博照の世話を焼きながら、「博の衣服を縫つて着せる。母親のすぎし労苦

10 横浜市総務局市史編集室編『横浜市史 II』第二巻（上）、一九九九年、横浜市、五頁

11 「（戦前・戦後感慨ノート）」（4-その他5-1）「復員」

を察す」(十一月十七日)との感慨も記している。

十一月二十日、満洲で亡くなった大古洞移住者の合同慰霊祭が柏心寺でおこなわれた。

博の服を着させて柏心寺へ。四百余柱の大古洞出身合同慰霊祭もおごそかに行はれた。博の入組中に世話になつた人に礼を云ふ。両親と同じ年頃の生存者を見るにつけ何が[ママ]云ひたい様な変な気持ちになつて来た。団員約千名の中三百五十名位死亡、三百五十名位引揚げ、二百名出征中、其他と云ふ。遺骨箱を三つも四つも持つて居るのは家ばかりではなかった。上郷だけで三十余あつた。

日本政府の進めた満洲移民政策は大きな犠牲をともなつて終わりを迎えた。ことに、長野県飯田・下伊那地域は、一地域としては日本最多となる八三五四人の満洲移民を送り出し、そのうち帰国者は四一九七人、四一五七人が帰還しなかったのである¹²。

この頃、全国の農村では外地からの引揚げ者が多く帰村し、極度の物資不足と食糧難に見舞われていた。昭和二十年十一月、食糧難の解決のため「緊急開拓事業実施要領」が閣議決定され、大規模な開墾・干拓・土地改良事業の実施が決まった¹³。他地域同様、食糧不足に悩まされていた上郷村では十一月三十日、適当な開拓地に村民を送出することを村議会で議決。さらにこの問題を推進するために開拓委員会を設けた。上郷村開拓団の入植地決定までにはさまざまな困難があつたが、翌昭和二十二年四月、岩手県滝沢村の一本木地区が開拓地と決まり、五月先遣隊が滝沢に入った。先遣隊のメンバーのほとんどは満洲（水曲柳・大古洞・信濃村）からの引揚げ者だったというから、上郷の人たち

は二度にわたって故郷を離れ、極寒の地で開拓にあたることになったのである¹⁴。この滝沢村一本木への開拓には、のちに政熙のもう一人の弟である下平忠孝も参加することになる。

さて、以上のような状況もあって、上郷村の親戚に博照を養う余裕はなかったのであろう。上郷滞在中に博照を引き取るよう話しがあつたようで、政熙は横浜にもどつた翌日、主人谷崎千久次に博照の雇用を打診している。そして同日に博照の「転入手続」として、「町会事ム所組長の承認」を得て「米配給通帖」を受領し、区役所でも手続きをおこなつた。しかし、「博照の転入に就て〔谷崎家より〕苦常〔情〕を云つて来た。なかへむづかしい」(十二月十二日)とあるように、博照の転入は谷崎家では歓迎されなかった。だが、なんとか博照の受け入れをまとめた政熙は、二十日に故郷に向かう。そして博照を引き取つて三十日の夜に故郷を立ち、「立ちづめ」の汽車旅で大晦日の早朝、横浜に到着した。

満洲からの引揚げ日記

ところで、博照は満洲での暮らしと引揚げについて日記をつけていた。日記は岩手県滝沢市にお住まいの下平忠孝氏（政熙の弟、博照の兄）が所蔵していたが、筆者が平成二十七年（二〇一五）五月に忠孝氏のもとを訪れた折に横浜都市発展記念館に寄贈された。日記は「徳用日記」を利用してつけられており、表紙にペンで「引揚記録帳 昭和廿年記」と記されている。記載期間は昭和二十年八月九日から二十二年一月二十六日まで（欠落期間あり）だが、帰国後に記憶をたどつてつけられた可能性もある。

本「引揚記録帳」は「時計屋さんの昭和日記」

12 飯田市歴史研究所編『満洲移民―飯田下伊那からのメッセージ』現代史料出版、二〇〇七年、一八四頁

13 島村恭則「引揚者が生みだした社会空間と文化」同編『引揚者の戦後〈叢書 戦争が生みだす社会Ⅱ〉』新曜社、二〇一三年、五〇頁

14 上郷史編集委員会編『上郷史』上郷史刊行会、一九七八年、一二六六～一二七〇頁

展開幕後に寄贈されたため、同展開連図書『時計屋さんの昭和日記』には掲載できず、ニュースレター（館報）で簡単な紹介をおこなっただけである¹⁵。満洲からの引揚げ者は原則として所持品を持ち帰ることができなかったため、その日記が残存しているのは珍しい¹⁶。また、戦後横浜に暮らした市民がかかる過酷な体験を強いられていたことを叙述することも、戦後期の都市生活を描く前提として意義のあることと考え、ここで同日記の内容を紹介することにしたい。

ソ連の侵入

昭和二十年八月八日夜、大古洞下伊那開拓団の下平博照は「変な音がした」ことを聞いた。同開拓団は満洲国三江省通河県、ハルビンと佳木斯の中間の松花江左岸にあって、ソ連国境からは約二百キロの位置にある。翌朝の八月九日、博照は学校に行く途中、本部の前で「小林さん」から「至急警察からの通知か〔だ〕から学校へ伝えてくれ。ソ連が不法シン〔侵〕入して来て昨夜爆弾を数箇所へ落して戦争が初まつた」ことを言づてされた。昨夜の「変な音」はソ連の爆撃音だったようである。博照は「マケルモノカソレンニナンカ」と口にしなが学校まで走っていき、校長に小林の伝言を伝えた。朝礼の時に戦争開始の話があり、学校は「一時休」みとなった。しかし、これが「一生の学校と〔の〕別れ」だったのである。

モスクワ時間の昭和二十年八月八日深夜、ソ連のモロトフ外相は佐藤尚武駐ソ大使に宣戦布告をおこない、ソ連軍が国境を越えて満洲に侵入してきた。ただし、同じ大古洞開拓団の原進はすでに八月七日の時点で、佳木斯、依蘭街を

ソ連機が爆撃し、東部国境で日ソが交戦中という情報を得て全部に連絡したというから¹⁷、日ソが交戦状態に入ったことを知っている者もあっただろう。

翌八月十日の朝、兄忠孝に召集の命令がきて、忠孝は即日出征した。いわゆる「根こそぎ動員」で、満十七歳以上四十五歳までの青壮年男子が多く召集されたのである。兄がいなくなった博照はこの夜、「ねる時にはさびしい思いを」した。翌日、家に居ても仕事に手がつかない。参戦したソ連は満洲に入り込んできて、国境地方では激しい戦争が続いているという。大古洞でも「時々大砲とキカンジュ〔機関銃〕の音が聞えて」きた（八月十一日）。八月十四日、大古洞開拓団は「皆此、へ落着く〔現在地を動かない〕」ことが幹部会・部落長会で決まった。翌日、日本はポツダム宣言の受諾を発表する。博照は「停戦の報を聞き皆安心したがまだアヤフヤである」と記した。八月十六日午後一時頃、ソ連の飛行機が「警備道路」に「宣伝紙」をまき散らしていった。紙には「ソ連と日本軍の声明を〔が〕支那語で」書かれていた。満洲国皇帝溥儀が大栗子で退位し、満洲国が滅亡したのは八月十八日である。

降伏、満洲の冬

八月二十三日、ソ連側が「満人（自警団）を使人に降伏を申すか申さんか」を尋ねてきた。大古洞では幹部会を開いて「降伏して生命をたもつ」ことを決め、「ソ連に降伏する」ことを使いに伝えた。翌二十四日午前八時頃、団本部へソ連軍兵士二十数名を乗せた自動車がやってきた。「鉄砲や刀などないふ〔ママ〕もは〔刃〕物は皆取」られた。さらに家の牛も奪取される。

15 吉崎雅規「『満洲』からの引揚げ日記—もうひとりの『時計屋さん』の昭和20年」『ハマ発NEWSLETTER』（横浜都市発展記念館）二五号、二〇一五年七月

16 齊藤俊江氏の教示による。なお同氏は近年、下伊那地区の満洲移民関係資料について歴史資料のみならず研究文献・写真・映像・音声にまで目配りしてまとめている。齊藤俊江『長野県飯田下伊那の満洲移民関係資料目録』不二出版、二〇二〇年

17 本島和人「逃避行から引揚げへ」飯田市歴史研究所編『満洲移民—飯田下伊那からのメッセージ』現代史料出版、二〇〇七年、一〇二頁

この後、「毎日の様にソ軍が来てらんぼうにはたらいて帰って行き」（日付なし）という状態が続くことになる（博照の日記は九月十七日まで途切れる）。満洲国政府が消滅し関東軍も解体したことから、日本人を保護する統治機構は失われており、大古洞に限らずソ連・満洲国境付近の開拓団の状況は悲惨を極めていた。

九月十七日午前四時頃、妹の日俊が「麻病」のため息を引き取った。相変わらず「毎日の様にソ連兵が満人と一所になって色々の品物を取って行く」という混乱状態のさなかである。九月のこの頃、「通河県のソ軍の一番位の高い」ロシア人が来訪し、「皆たちは今年はどこへも行く事が出来ない。作物・米・大豆・もろこし（苞米）など色々取入れ越冬の準備などしておけ」と告げた。さらに、「来年になれば日本人は内地に行く事になるだろう」とも話して立ち去った（九月・日付なし）。博照らは作業班を作って「稲かり・大豆かり・キビカキ、ムギ・小豆」などの穀物刈り取りをおこない越冬に備えた（日付なし）。摂氏マイナス三十度におよぶ満洲の厳しい冬が迫っていた。

昭和二十年の大晦日、夕飯の「お年取」の魚は小川の氷の下から獲ってきたフナ・ドジョウ・ナマズなどの煮付けと白米だった。昭和二十一年の元旦、八時に「四方拝の式」をして、朝食は餅をストーブやコンロで銘々焼いて新年を祝った。

一月頃、大古洞開拓団の「自由解散」が決まった。博照の部落（竜西部落、出身の地域ごとに部落を形成した）では、「皆一所に死生をともしにする」「部落でまとまって行く」ことに話しがまとまった（一月四日と二月二日の記述のあいだ）。ただし、「どこでも行きたい人は皆かつてにする様、むりに一所になれと言はせぬ」と各人の行動には制約をつけない決定だった。なかには「泣いて居る人も居た」という。

二月下旬、「米を喰ってしまった。これから大豆・きびなどを喰はねばならぬ〔ぬ〕」。米が尽きたのである。この頃から母むつよの体調が悪くなってきており、博照は「警備隊」の仕事を休んで看護にあたることもあった。三月十二日からは熱を出して寝込むようになり、博照は「裏の池から氷を取て来て、毎日頭をひやしてやつた」。そして三月二十二日十時半頃、博照が母の粥を作っているときに、「母の息がだんへ悪くなり、十一時頃息を切った」。午後、母を棺桶におさめ、翌日に大古洞河の傍で火葬にした。夜は部落の人たちが「お経を上てくれた」。

ハルビンへ

昭和二十一年の春、日本人の引揚げがはじまるという噂が満洲でひろまりつつあった。日本国内ではアメリカが主導するかたちで引揚げ援護体制が固まり、朝鮮南部や台湾からの引揚げ者受け入れがはじまっていた。アメリカは中国社会の不安定要素になりかねない日本人を早期に送還させ、国民政府を支援することで中国の戦後復興に道筋をつけることを意図していたのである¹⁸。四月、日本人送還の情報を聞きつけた在満開拓団に、ハルビンに集まる動きがあった。博照のもとにも、柏崎開拓団の団員約二百人がハルビンへ行ったという報がはいり、大古洞の団員にもハルビンに向かう者が増えてきた。そして父準太郎も四月十五日にはハルビンに行くことを決心した。五月四日、ハルビンから「元国際運輸」の「三延さん」が来て、「日本人は皆哈爾濱〔ハルビン〕に来た方がよい」と忠告した。これが皆の背中を押したようで、大古洞開拓団の一行六百名は五月七日、四百キロ離れたハルビンまでの徒歩移動を開始した。この日の午後一時に清河鎮まで移動。博照は「丁度熱病のような病気に患っていた」が、出発の日には「病気はだいぶん快くなつて」いた。

18 加藤聖文「戦後東アジアの冷戦と満洲引揚―国共内戦下の「在満」日本人社会―」『東アジア近代史』第九号、二〇〇六年

翌五月八日から博照たちは本格的な「行軍」を開始した。しかし間もなく、徒歩での厳しい移動で父準太郎は足を痛めてしまう。十七日には足の状況が悪化したことから、「途中で馬車を買って」移動した。十八日には本隊とともに歩けない状態となり、博照と父は皆と別れて「満人部落」で宿を借りた。「三日泊つて休んでも父の足は快くならん」という状況だったが、なんとか四時間かけて一里を歩き、また次の部落で家を借りた。休み休みの移動をへてふたりは五月三十一日午後三時、ようようハルビンに到着した。

ふたりは「農民部」で相談をして、日本人難民収容所のひとつである花園収容所へ行くよう指示を受けた。同所にたどりつくと、大古洞開拓団の本隊が昨日新香坊収容所に入ったと聞いた。しかし父準太郎の体調は市内の短い移動を許さず、ふたりは新香坊にとどまらざるを得なかった。数日しても父の体調はよくなり、「ます―疾〔疲〕れが出て」体が弱くなるばかりだった。「い〔医〕者は居ても薬がない。い者もやぶい者でなをる見込がない」（六月一・二・三日）。準太郎も「どほせ死ぬなら知た人や部落の人のそばのがよい」と言うようになった。六月八日、ふたりは車で「念願の」新香坊収容所に移動し、竜西部落の人たちと久しぶりに再会できた。部落の人たちも「道中の疲れで皆弱つて居り」、病人もたくさん出ていた。何とか再会を果たした準太郎だが体調はもどらず、六月二十一日午後一時、栄養失調のため逝去した。享年五十七歳だった。博照は「自分も体が悪くて思ふよ〔う〕に見てやれなんだ」ことを悔やんだが、「もう後で何を思つてもだめだ」ったのである。

この後博照は九月四日にハルビンを出発して

帰国の途につく。途次、高熱のため奉天で下車して一旦第二患者収容所に入った（九月八日）ものの、回復をみた十月六日に奉天を出発。葫蘆島から引揚船摂津丸に乗り、昭和二十一年十一月三日、佐世保に帰着したのである。

忠孝の戦後

ところで、八月十日に根こそぎ動員で博照と別れた下平忠孝はその後どのような運命をたどったのだろうか。下平忠孝氏の回想によれば、忠孝たち大古洞から動員を受けた六十九名は、佳木斯八五三部隊の兵舎で特設警備六〇三大隊に編成された。同大隊は佳木斯の都市防衛と避難民護衛を任務としていた。十二日夜、あと二時間でソ連の機械化部隊が突入しようというとき、六〇三大隊は松花江の鉄橋を爆破して撤収、二十日頃に綏化に到着した。そこで停車場司令部より終戦を告げられた忠孝たちは、綏化飛行場の滑走路に軍銃をならべてソ連軍の武装解除をうけた。九月の末頃に忠孝は黒河に移動、黒竜江を渡ってソ連領のブラゴエシチエンスクに入った。さらにエニセイ河を越えてクラスノヤルスクに送られた忠孝たちは同地第八分所の収容所に入り、シベリア鉄道管理局の建設現場で約三年間にわたって強制労働を課せられることになる。昭和二十三年十月六日、忠孝は舞鶴に復員、故郷上郷村にもどった。同年十二月、前述の岩手県滝沢村への開拓団に参加して岩手山麓の土地開墾にあたり、のちに同地で下平牧場を開いている¹⁹。兄政熙とはお互いを信頼しあっており、終生やりとりがあった。

19 下平忠孝『農に生きる』私家版、二〇一五年（編集協力高瀬雅弘）。および同氏からの平成二十七年五月の聞き取り調査による。なお、上郷村から滝沢村への開拓については、黒澤勉『オーラルヒストリー「拓魂」——満州・シベリア・岩手』風詠社、二〇一四年、も関係者からの聞き取りによってふれている。

3 食糧事情と物不足

昭和二十一年の食糧危機

本節では、政熙の復員以降の横浜の食糧・物資不足、とりわけ食糧事情について政熙の日記と関連史料から探ってみたい。

昭和二十年の米の収穫量は相当な減少をみていた。くわえて、敗戦にともなう供出意欲の低下もあり、昭和二十一年の米の供出量は全国的に減少。同年四月以降、東京を中心に配給の遅れや欠配が多発し、食糧管理体制は機能不全に陥っていた²⁰。四月末には横浜市でも「食糧危機は刻々として迫り、主食の遅配の三日や四日ぐらゐは当り前のことになり一般民衆の食生活は脅かされ通しだ」²¹という状況になった。五月六日、「県下の食糧事情は遂に最悪の事態に立到り、遂に県自体がいくら手を打つても到底改善出来る見込がなくなつた」ため、神奈川県知事内山岩太郎はアメリカ第八軍軍政官メルバーク大佐を訪問、県下の窮状を説明して連合軍の救援を懇請した²²。政熙が復員した昭和二十一年五月から六月の横浜は「食糧危機」の最中だった。

政熙も床屋に行つて「食料事情も分る。とうもろこしを粉ひき機で廻して粉となし主食代用となるのだ」（昭和二十一年六月六日）と、食糧事情の厳しさを聞いた。政熙は「にはとり骨をくぐらいて粉ひき機でこまかく」して夕食のすいとんに入れる（七月八日）など、食事に工夫をこらした。また、自給用の「農園」での作業もはじめたようで、「夕方農園へさつまいも苗植える」（六月二十六日）、「山の畠へ行く、奉仕。大根まく土を掘り起す。」（八月二十六日）など食物栽培の記述も散見されるようになる。しか

し、「さつまいも盗まる」（八月二十六日）、「裏の南瓜二ヶ盗まる」（八月二十八日）と、栽培した食物が盗まれることもあった。また「博照、店への留守中食物荒しの現行犯を見つけ、裸にして水を浴びせた」（昭和二十三年十二月十八日）など、店が「食物荒し」に遭うこともあった。

政熙は配給品を各戸に分配する「隣組配給当番」にもあたった。「炎天下日蔭もなく行列して、隣組の野菜を受けて来て各戸に配分するも並々ならぬものがあるを知る」（昭和二十一年七月二十三日）。当該期の配給は、戦前期と同様に町内会―隣組という回路で実施されていた。また、連合軍の食糧放出によって「ピ〔ビ〕スケツト・チーズ・ソーセージ・ココア・コーヒ・サトウ・食塩・チューインガム・干肉・煙草・マツチ」などが配給されることもあった（十月十二日）が、こういった配給も町内会を経由していたようである。

七月十八日、政熙は伊勢佐木町と野毛のヤミ市を見た。「昼食后、野毛の地方世話部へ在営当時の未給与請求に行く。変りはてたザキ〔伊勢佐木町〕も復興の色が浮んで居る。早くも建てられた新しい店がバラツクと共に店はひろげられて居た。野毛ノマーケット、俗に云ふヤミ市には商品も次第に並べられてあるが、値の高い事は云ふまでもない」。しかし、政熙はヤミ市で買物をする事はなかった。価格が高すぎたのである。戦後混乱期横浜の代表的なヤミ市として知られる野毛だが、必ずしも多くの市民がここで買物をする事はできなかったのかもしれない。

20 小田義幸「占領初期の食糧輸入実現をめぐる交渉過程」同『戦後食糧行政の起源――戦中・戦後の食糧危機をめぐる政治と行政』二〇一二年、慶應義塾大学出版会、二三三頁

21 『神奈川新聞』昭和二十一年五月一日付

22 『神奈川新聞』昭和二十一年五月七日付。なお、内山知事はすでに四月十三日に第八軍司令官アイケルバーガーに面会し、横浜市民に食糧を提供することを要請。その後第八軍神奈川軍政部に通つて食糧放出の要請を重ねていた。天川晃『占領下の神奈川県政』現代史料出版、二〇一二年、一五〇頁

買い出し、引っ越し

昭和二十一年の食糧危機は、『神奈川新聞』が「県下の主婦たちが食べもので苦労したのは六月がヤマ」（昭和二十一年九月七日付）と述べるように、六月を境に好転する。九月二十日現在、横浜市中区の七十二町内会では、「半数に近い二十九町内会までは遅配なし、全区内平均遅配二日八分」²³という状況にまで回復した。政熙も九月二十四日の日記に、「今日は彼岸となりぬ。実りの秋だ。食料事情もよくなってきた」と記した。

しかし昭和二十二年二月に入り、横浜市の食糧事情はまたも深刻化しつつあった。今回は「輸送事情の悪化」がその背景にあり、主食の遅配が多発した。野菜類も「冬枯期のため市内産は少く、僅に三浦大根によつて需要をみたしている」²⁴のが実情で、十二日現在の「市内平均遅配はすでに七・二日にも達し」ていた²⁵。二月八日、政熙は市内の農村に食糧の買い出しに出かけた。

米の遅配に依り、主食代用さつまいもの買い出しに三人で氷取沢〔現横浜市磯子区氷取沢町〕の方へ行く。目的の金子様でことわられて、それ以来転々と廻つたが遂に得られず。二里余の道を歩いて大根を買って帰つた。

氷取沢は西根岸町から八～九キロ南に離れた、丘陵のあいまに田畑が点在する農村地帯である。この頃、農家ではヤミ行為（不法に農作物を売却すること）が多くおこなわれていた。港北区の市民によれば、「僕の知っている農家で、恐らく闇行為をしない家といつたら、まず一軒もない」という状態で、この二月頃には「米

麦の横流し」はもちろんだが、「甘藷〔サツマイモ〕と青物」の闇売りが「眼につく」ようになっていたという²⁶。しかし、政熙たちは一日歩き回ったもののサツマイモの入手すらできなかった。

思うような食糧が得られなかった政熙は、「食料不足により起る苦しみ」を味わいながら「十一時まで仕事続行する」こともあった（二月十三日）。三月十日には、「遅配も十日余となる。台所も容易ならぬものあり。かゆの一椀も有難く頂く」とあって、食糧事情がいよいよ逼迫してきたことがうかがわれる。

このようななか、博照の賄い経費について谷崎家より話しがあった。「賄費に就ても自分の意見としても世話になる身で異義〔義〕はない」と政熙は考えていたが、「欠配にて賄が出来ない」と言われては、生きるために「細かい点にも考へ出さねばならぬ」かった（二月十七日）。賄い問題がきっかけとなり、政熙と博照は谷崎時計店から引っ越して自分たちだけで「自炊」生活をはじめることを決める。

新しい住まいは磯子区滝頭町字浜（現磯子区中浜町）にあり、谷崎時計店からは堀割川をはさんで五百メートルほど、川の河口にかかる八幡橋にほど近い。谷崎時計店の「作業場」「出張所」のような扱いの場所であったようで、そこをふたりは借りることになった。三十日、「八幡マーケット新築成り、掃除並に障子張り、安全カギ付け、中食后主人共に入口の戸を付ける」と、新居の準備が整った。三月三十一日が引越し当日で荷物を運びこむ。夕食時には主人たちも集まり「稻荷様に供へ物」をして、肉をご馳走になった。「電気・水道・建具もない家」²⁷での生活のはじまりである。政熙は当初この家

23『神奈川新聞』昭和二十一年九月二十二日付

24『神奈川新聞』昭和二十二年二月四日付

25『神奈川新聞』昭和二十二年二月十五日付

26『神奈川新聞』昭和二十二年二月十二日付

27「(戦前・戦後感慨ノート)」（4-その他5-1）「回顧」

から谷崎時計店に歩いて通勤していたが、八月二十四日には机や修繕道具を運びこみ、こちらで仕事をするようになった。

昭和二十二年の献立

ところで、下平政熙の関連文書のなかに、この時期の下平家の献立を記したノートが残されている²⁸。毎日三食の献立（食材）をそれぞれ「主食」・「副食」・「おかず」と分けて記しており、下平家の毎日の食事内容を知ることができる。書き手は下平博照と思われ、献立は兄弟二人分のものであろう。紙幅の関係から本資料の本格的な分析は今回できないが、こころみに昭和二十二年五月の内容（史料編、75頁～79頁）を紹介してみたい。

「主食」の項目には米（雑穀）・パンなどの主食が、「副食」欄には魚や野菜が、「おかず」の欄には漬物の内容が記されている。主食は米に麦や豆を混ぜたいわゆる雑穀米が多く見られる。一番多いパターンは米に麦と豆（グリーンピース）を混ぜたもの（「麦豆飯」）で、主食全九十三食中三十二回（三十四％）、続いて米に豆のみを混ぜたパターン（「豆飯」）で二十六回を数える。その配合割合についても、たとえば「米3合・麦1合・グリーンピース1合」などと几帳面に記される。そのほか「すいとん」が三十回（二十八％）、うどんが二回、パンが二回という割合になっている。下平家ではおもに朝食と昼食に「麦豆飯」あるいは「豆飯」を摂ることが多く、朝食（全三十一回）ではいずれかを二十六回、昼食でもいずれかが二十七回見られる。一方夕食ではすいとんが二十四回を占め、雑穀米は五回にとどまっている。

副食のうち、タンパク源となる魚については、

「魚肉」「魚ひらき」「いわし」「干たら」「魚肉スープ」「魚肉ハンペン」「あおやぎ」「ぬかづけ魚」（「おかず」欄に分類）などという名称で記されるが、九十三食中十六回しか見られない。肉類はまったくあらわれない。野菜については、ゴボウ、大根、人参、ネギ、玉ネギ、ジャガイモ、キャベツ、馬芋、トロロ芋、フキの茎、ミョウガなどが見られ、おおよそ味噌汁（たまに「スープ汁」）の具にしている。漬物は「味ソづけ」「ぬかづけ」「青づけ」などで、タクアンや梅（梅干しか）が多い。

この頃の横浜の食糧事情を確認してみよう。昭和二十二年五月五日現在、横浜市の配給の遅配は平均二日で、「初夏のおとずれとともに食生活も好転の一途をたどりはじめ」ていた。とくに米の供給は比較的順調で、緊急輸送の廻米もこの月は「だいたい消費量を上廻るという明るい見通し」がつくようになった²⁹。第五次輸入放出食糧の配給も横浜市では十八日頃からはじまる予定になっている³⁰。魚についても「価格の引上げ（平均五割）と取締りが全国化してきて漁期に入つたこと」を背景として流通量が増加、ことにイワシが豊漁となっていた³¹。下平家の献立を見ると、前月四月には主食がサツマイモのみで米がない日もあったが、五月に白米が入らない日は一日もない。また、輸入食糧の大麦が再配給されたことによって、一時「豆飯」続きとなった食卓は二十三日から「麦豆飯」となっている。イワシなどの魚類も中旬以降の献立に多く見られるようになった。比較的配給状況が良好だったこの一ヶ月の献立から戦後混乱期の食事情全体を語ることはむろんできないが、下平家の献立には横浜を取り巻く食糧事情との相関関係が見られる。

28 横浜都市発展記念館蔵下平修嗣家文書2,4,5,21。昭和二十二年二月～二十五年七月の食事内容が四冊に分かれて記されている（欠落時期あり）。

29 『神奈川新聞』昭和二十二年五月六日付

30 『神奈川新聞』昭和二十二年五月十三日付

31 『神奈川新聞』昭和二十二年五月三十一日付

戦後の食糧危機に関する研究については、行政の対応（食糧管理体制）に関しては論考の蓄積が厚く、神奈川県・横浜市の事例も知られている³²。また、当該期の横浜における市民の食事情については日記等からの紹介がある³³ものの、一定期間、同一様式で毎日三食の献立を記した本資料は、戦後混乱期横浜の食糧事情を庶民側から客観的に分析しうる貴重な資料になるだろう。

引揚げ者援護

戦争の終結にともなって海外から引き揚げてきた者たちの生活再建は容易ではなかった。そこで昭和二十一年四月二十五日、政府（次官会議）は「定着地に於ける海外引揚げ者援護要綱」を決定し、「緊急援護の方途を講じ」て引揚げ者の「生活再建」をはかろうとする。各都道府県に「都道府県引揚げ者援護連絡本部」を、市区町村には「引揚げ者相談所」を設置し、引揚げ者の生活の援護体制が整えられた³⁴。

昭和二十一年十二月九日、政熙のもとに「引揚げ者生活調査表」が送られてきた。行政は引揚げ者の生活実態を把握しようとしていたのである。十二月十五日には「引揚げ者配給券」が届き、翌十六日政熙は区役所に設置された「引揚げ者（配給）即売場」へ行った。戦争で夫を亡くしたのか、「子供をつれた婦人」を多く見かけた。「大勢の人にもまれ」ながら品物を見たが「やはり思ふ品は」なく、「靴下一足」を買うにとどまった。物不足という状況は「だれもが同じ〔じ〕だ」と云ふ事を政熙は理解した。

昭和二十二年一月二十日、政熙は「引揚げ者援

護」の方から「夜具を下さる」とのことで区役所に博照を連れて行った。本来は「毛布だけの所」だが、「松沢様心配下さつて」「ふとん二枚」を受け取ることができた。三月十一日、政熙満三十才の誕生日には「引揚げ者ヘズボン支給さる」。同十七日には「引揚げ者ヘカンヅメ配給の通知」があった。九月十七日には「引揚げ者衣類配給の箋で一本も当らず」とあり、くじ引きによって衣類が引揚げ者に割り当てられていたようすがわかる。また、「引揚げ者蚊帳購入票」（九月二十日）や、「引揚げ者の湯わかし購入券」（十一月二日）が届くこともあった。

昭和二十二年一月二十八日、下平家に「引揚げ者援護協会」へ加入をすすめる「カンユー〔勧誘〕」が来た。翌日、政熙は弟の博照を同協会に「加盟」させている。この「協会」は地方公共団体がおこなっていた引揚げ者援護事業とは別の、民間による団体であるようだ³⁵。十一月十一日には「引揚げ者協会ザキヘ開業」ともあり、伊勢佐木町に同協会が設置されたことも記されている。

4 独立・結婚

独立開業

政熙が移り住んだ八幡橋の住まい兼作業場は、昭和二十二年九月十二日に谷崎時計店の「支店」として開業する。しかし、「売上げも十・十一・十二と次第に少くなり」、八幡橋支店は十二月いっぱいまで閉店することになった（昭和二十二年十二月末尾）。これには「地の利悪くそれと所得税が重なつて」³⁶という事情があっ

32 たとえば、小田義幸『戦後食糧行政の起源一戦中・戦後の食糧危機をめぐる政治と行政』慶應義塾大学出版会、二〇一二年、鈴木猛夫「占領期の食糧援助と戦後日本の食生活」『環』二二号、二〇〇五年、大豆生田稔「食糧供出とヤミ」横浜市総務局市史編集室編『横浜市史Ⅱ』第二巻（上）、横浜市、一九九九年、天川晃『占領下の神奈川県政』現代史料出版、二〇一二年、など。

33『横浜の食文化』横浜市教育委員会、一九九二年

34「定着地に於ける海外引揚げ者援護要綱」厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』ぎょうせい、一九七八年、五七九～五八〇頁

35 この「引揚げ者援護協会」の性質については西村健氏の教示を得た。

36「（戦前・戦后感慨ノート）」（4-その他5-1）「回顧」

た。

しかし、政熙はこれを機会に「独立開業を決意」する。政熙は戦前期から「独立開業する為に益々商業道徳を修業し修繕技術向上のため奮闘」³⁷しており、昭和十六年頃より具体的に独立開業を考えるようになっていた。出征で計画は延期を余儀なくされていたが、ついにその機会が訪れたのである。

昭和二十三年一月二十日、「六時起床、開業記念に赤飯をたいて」祝った。日記の記述は淡泊であったが、政熙はこの日を大きな喜びをもって迎えていた。のちに政熙は開業日を次のように振り返っている。

昭和二十三年一月二十日。あゝ此の日こそ自分にとって一生忘れる事の出来ない喜びの日であり希望の日であつた。十有余年社会の荒波にもまれ黙々と働いて来たのもこの日の喜びを味ふため、あらゆる苦労とも闘ひ援〔抜カ〕いて来たのだ。³⁸

これ以降、政熙は弟の博照とともにみずからの時計店の仕事に「唯夢中になつて働いて」いくことになる。朝早くから夜遅くまで「お客様には親切に、修繕は丁寧」に心をかけて、「真面目を忘れずに、正直に商売」をした。谷崎時計店の主人も「下職」（時計の修繕）をたくさんまわしてくれたし、客が別の客を紹介してくれることもあった。「他人を頼らずに〔仕事を〕進めるには並大抵の苦労ではない」が、「其の苦労を実行してこそ喜びがある」と政熙は考えていた。「他人から見たら、一日中遊ぶ暇もなく過して馬鹿らしくも見えるかも知れないが、自分にとってはこれで満足だ」。そして、「裸一貫から少しづつ材料がふえた。商品も一つ宛ふえて来た。陳列も入れて少い乍らも店らしく

なつて来た」とだんだんと店が体裁を整えてきたことに喜びを覚えるとともに、「博照も大物位直す様になつた」と弟の技術の成長も頼もしく見守っていた³⁹。

政熙の娯楽

政熙の数少ない娯楽は戦前期同様ラジオであった。ラジオ番組のうち、政熙は放送劇（ラジオで放送する演劇）を楽しみにしていた。たとえば、昭和二十三年三月二十九日の放送劇は、主人公を裁判官として母と娘が苦しい家計をやりくりしている内容（昭和二十二年十月の山口良忠裁判官の餓死をモデルにしたもの）で、政熙は「苦しい世想〔相〕がよく現はれていた」とこれに聞き入った。また、「夜放送劇「霊」を聞く。狭い心を反省した」（二月十六日）と放送劇を聴いてみずからを戒めることもあった。政熙は新聞をとっていなかったため、時事ニュースはラジオから得ていた。「決戦投票の結果吉田茂氏に首相指名さる」（昭和二十三年十月十四日）、「下山国鉄総裁死体となつて発見さる。国鉄人員整理発表后にて、世想〔世相〕悪し」（昭和二十四年七月六日）など、簡潔ながらニュースの内容や感想を日記に記すこともあった。

政熙のラジオへの愛着は深く、昭和二十一年十月にラジオのゼネストが実施されると、「ラジオゼネストで国家管理となりニュースだけ放送とはさびし」（十月八日）と残念がった。ゼネストは二週間以上続いたが、十月二十六日に「今日からラジオゼネスト解除。放送が初〔始〕まる」と、「ラジオを友としての仕事は輪〔愉〕快なり」と、その再開をおおいに喜んだ。「ラジオを友として〔中略〕誤〔娛〕楽と修養を兼ねて一日を送る」（昭和二十一年九月十七日）とあるように、政熙にとってラジオは娯楽と自

37「（戦前・戦后感慨ノート）」（4-その他5-1）「回顧」

38「（戦前・戦后感慨ノート）」（4-その他5-1）「創業一年を回顧して」昭和二十四年六月十五日

39「（戦前・戦后感慨ノート）」（4-その他5-1）「創業一年を回顧して」（昭和二十四年六月十五日）

己研鑽を兼ねた必要不可欠な存在だったのである。

このほか、政熙は読書も愉しんでいる。ベストセラーとなっていた太宰治の『斜陽』には、「太宰治著斜陽の中より、待つ、あゝ人生つて九九パーセントは只待つて暮して居る人ではないでせうか。幸福の足音を今か今かと待つてカラッポ」（昭和二十四年十月十六日付）との感想を抱き、マーガレット・ミッチェルの『風と共に去りぬ』からは、「風と共に去りぬの中を読み生々しい戦場の様子が思ひ出される」（昭和二十四年十一月九日）と、戦場を想い起こしている。

街に出かけて楽しんだ記述は、戦前期にくらべると多くない。ことに復員直後の昭和二十一年から二十二年にかけてはほとんど日記に見られなかったが、昭和二十三年以降、外出して街で気晴らしをする記述も少しずつだがあらわれるようになる。昭和二十三年二月二十一日、政熙は野毛を訪れたついでに映画を「久しぶり」に見ている。伊勢佐木町の映画館に行ったのだろう。政熙が観た映画「ニュームーン」は昭和十五年にアメリカで封切られた洋画で、日本での公開はこの二月であった。七月四日には「米独立祭花火」を見物にいった。アメリカの独立記念日に横浜港で催行されていた花火大会で、戦前からの恒例行事である。夏には地域の「納涼演芸会」に行くこともあった。「夕食后博照と交代で納涼演芸会を見に行く。コロムビア及磯子芸妓の出演へ、燈ろう流しを見てかへる。〔中略〕外気にふれ、若き男女の服を見るだけでも気分を味つた」（昭和二十五年八月十五日）。

昭和二十四年六月には横浜で開催されていた日本貿易博覧会を見にいつている。神奈川県と横浜市の共同開催で三月十五日に開幕したこの博覧会は、六月十五日までの会期に三百六十万

人の入場者を得た。主会場は神奈川区の反町会場、さらに野毛会場には子ども向けの館が設置された⁴⁰。政熙の家でも六月五日、弟の博照を「博覧会见物」に行かせたのち、みずからも十一日に出かけて「野毛山会場を一巡して反町会場も一巡」した。日本の貿易状況はいまだ「隘路」にあった⁴¹ものの、博覧会の開催は市民に明るい前途を見せるものであった。

見合い結婚

戦後まもない昭和二十二年から二十三年、「第一次婚姻ブーム」が生じて婚姻数が激増、新聞は「結婚シーズン」といわれるきょうこのごろ⁴²と、結婚の隆盛を報じていた。政熙のもとにも、昭和二十四年頃より縁談（見合い話）が持ち込まれるようになる。この年の三月三十一日、政熙は「縁談に就て占を立てて」もらい、「四月から五月に二十四才の人より話がある」「五人の相手があり財産は築く人だ」などの占いを告げられている。この翌日（四月一日）、故郷の親戚がやってきて「縁談」について「色々と御高配」があった。話しのなかで「24才の人」が近くにいることもわかったという。

この頃、妹久保の縁談が進んでおり、政熙はその相談に乗っていた。八月七日、久保が天野という男性を連れて政熙のもとを訪れ、「縁談に就て御話」があった。政熙はふたりを家に泊めて歓待する。「僕も大賛成で二人共乗気」の縁談であった。政熙は久保には内緒で故郷の「少い畠を敵〔抵〕当に出して」金を借りて、資金援助をしている。八月二十八日、久保の婚礼がおこなわれた。「大変盛大に被〔披〕露式が済」んで、政熙は「一安心した」。

翌昭和二十五年三月十一日、政熙の誕生日である。「満三十三才となつた。思へば長い年月を営業、技術、修業のために全力を傾けて来た。

40 横浜市総務局市史編集室編『横浜市史 II』第二巻（下）、二〇〇〇年、横浜市、一二八～一三〇頁

41 『神奈川新聞』昭和二十四年六月十七日付

42 『神奈川新聞』昭和二十四年十月二十六日付

下平時計店も芽生て来た。〔中略〕そして・・・もう一つ人生を、家庭生活の方もたゆまぬ努力で実を結びたい」と記した。前年六月一日、八幡橋の住居兼店舗は政熙自身の名義となり、政熙はさらに仕事に精を出すようになっていた。仕事の安定につれて政熙は「家庭生活」の充実も希求するようになる。

ところで、当該期における夫婦の出会ひのきっかけは見合いの割合が高かった。「出生動向基本調査」（国立社会保障・人口問題研究所）にもとづく研究によると、昭和二十九年以前に結婚した夫婦の出会ひのきっかけは、「見合いで（親せき・上役の紹介を含む）」が五十八%と圧倒的で、「幼なじみ・隣人」（10%）、「友人・きょうだいを通じて」（10%）がそれについている。そして「見合い」の割合は平成期まで低下を続けることになる⁴³。見合いの盛衰は周知のことに属するだろうが、政熙日記には見合いから結婚にいたるまでの儀礼や手続きを日付とともに記しており、この時期の見合い結婚の過程を知るうえで興味深い。

昭和二十六年二月十二日、政熙は谷崎千久次同席のうえで縁談をもってきた「茂木様」と会い、「見合ひ」の日取りを十七日と決めた。茂木については不詳だが、千久次の知り合いか顧客だろうか。二月十七日、政熙は岩崎とよと見合いをした。場所は谷崎時計店である。大正十五年（昭和元年、一九二六）生まれのとよは二十四歳で、政熙より九つ年下、横浜の人であった。政熙はその日に早速、田舎へ手紙を書いて報告かたがたこの縁談について相談。夜は十二時に床についたが「美しき将来をまぼろしにゑがき、時計が二時半が鳴るまで眼〔寝〕つかれなかつた」。初めての見合いで、政熙はとよに好印象を持った。二月十九日、政熙は茂木に「健康診断書・戸籍謄本・写真」を預けた。これは縁談承諾の意である。二月二十三日、谷崎千久

次から「岩崎様縁談の申込承諾の由」を聞き、夕方茂木から健康診断〔書〕と戸籍抄本を受け取った。「今後の日取に付、色々話」があったが、政熙は主人と相談したいとして一旦茂木は帰った。

二月二十七日、政熙は初めて岩崎とよの家を訪問、とよの母と一時間ばかり話しをして辞去した。三月二日、結納を六日とすることが決まった。三月五日、政熙は「これからの明るい家庭生活を空想し乍ら」仕事をこなしつつ、「今迄重なっていた責任のバールをぬぎ捨てて」「我が家に訪づれる春」を感じていた。

三月六日、「結納」がおこなわれた。谷崎時計店が会場で、谷崎千久次の娘京子が「料理・接待等の準備万端」を担当した。岩崎家からは母・兄が出席。仲人の茂木も参加する。結納を拝受したのち、こたつに案内して「酒、さしみ、すのもの、かきフライ、サラダ、ホーレン草と飯、つゆ、みかん」で岩崎家をもてなした。三月十五日、政熙は岩崎家を訪問。「指環のゲージ」を測り、翌日政熙は指輪を注文した。この頃二人は「恋文」「ラヴレター」をやりとりしている。三月二十七日、政熙はとよを家に迎え、「レコードを掛けたり雑談の中に一日をたのしく過」し、帰りに婚約時代の記念写真を撮影した。政熙は「今迄機械を直す仕事に没頭する事と音楽を聞く事によつてすべての苦しみも忘れていた」が、「今まで下積になっていた愛情も芽生えて来た」（三月二十八日）ことを感じていた。

四月十四日、結婚の日である。七時起床。政熙の親族として叔父・弟忠孝・妹久保がやってきて準備の手伝いをしてくれた。十時に婚礼の荷物が到着した。昼後に谷崎時計店へ着物を持参していく。二時頃、「三々九度杯交す」。記念写真を撮影。三時半頃より「披露式」をおこなった。「皆々様の御蔭で盛大に滞りなく済」まし

43 岩澤美保・三田房美「職縁結婚の盛衰と未婚化の進展」『日本労働研究雑誌』No.五三五、二〇〇五年

たあと、「近所廻り」をして「御開き」となった。

● おわりに

政熙ととよが結婚した日、『神奈川新聞』は戦後の県の社会情勢を回顧する特集を組んだ。昭和二十一、二年頃「常に遅配、欠配に悩まされ」ていた食生活は、最近では「二合七勺の基準量」の配給もおおむね確保され、県民は「毎日さして空腹をおぼえることなく仕事に精を出すように」になっていた。県下の工業生産も増加し、生活必需品は戦前（昭和九—十一年平均）の五十二％まで回復、横浜港を通じての輸出入貿易も戦前の活況に向いつつあり、輸出額は二十二年の十三億円が二十四年には三百六十三億を示すまで増大をみた⁴⁴。横浜は急速に復興しつつあったのである。

昭和二十六年九月八日、サンフランシスコ講和条約が結ばれた。翌二十七年三月、政熙ととよのあいだに長男修嗣が誕生する。その後夫婦は晃嗣、哲嗣とさらにふたりの男子に恵まれた。政熙は下平時計店の店主として終生を過ごし、平成六年（一九九四）一月十日、八幡橋の自宅で亡くなった。満七十六歳だった。弟博照はその後も兄の時計店に勤め続け、平成三年に死去。もう一人の弟忠孝は今も存命である。

政熙の日記は結婚後も継続し、その死の前日までつけられるが、結婚以降の記述は少々淡泊になり、以前よりも政熙を取り巻く社会のありようをうかがいづらくなる。それは幸せを手に入れた証なのかもしれない、また、国家や社会が個人に強い制約や影響をおよぼす時代が終わったととらえることもできるかもしれない。

本連載では、下平政熙という個人の人生を昭

和五年から二十六年までの日記から追いつつ、横浜の都市生活のありようと変容を主に検討してきた⁴⁵。個人は歴史のなかでもっとも小さい単位であるが、政熙というひとりの人生からは、都市生活の具体像のみならず日本（横浜）の経済、対外関係、文化といった幅広い領域にまたがる意外なほどにも豊かな歴史像が立ちあらわれる。くわえて、政熙の人生と平行して存在した家族の人生もあわせ見ると、満洲移民とその引揚げといった戦中・戦後の重要な歴史トピックも視野に入ってくる。そしてそれらの歴史像を、政熙という個人の視座から見ることによって、私たちはより深く、身近にその時代相を感じ取ることができるだろう⁴⁶。

最後に、本日記と関連資料の紹介にあたっては下平政熙氏の長男・下平修嗣氏より、ご理解ならびにご助言をいただいた。心より深くお礼を申し上げたい。また、本日記の内容にかかわる様々な事実を教えていただいた下平忠孝氏、アリガ・キミコ（紀美子）氏にもお礼を申し上げる。

44『神奈川新聞』昭和二十六年四月十四日付

45 なお、戦中・戦後期の横浜の日記を利用した最近の研究成果として、令和三年七月十五日～九月二十三日に催行された横浜市史資料室展示会「戦後横浜—それぞれの出発」を挙げておきたい。

46 なお深谷克己は、「（社会発展史について）個人の人生、生涯に即してとらえかえされるとき、歴史の流れを外在的なものとしてではなく、歴史が個々の人間にとってなんであるのか、ということについてより深い共感と了解に達することができる」（深谷克己「歴史学と個人史の研究・叙述」同『深谷克己近世史論集 第一巻 民間社会と百姓成立』校倉書房、二〇〇九年、一七六頁）と述べており、個人史の作法について多くの示唆をあたえている。

8	朝	麦豆飯 米3合 麦1合 グリンピース2合	味ソ汁 大根 同葉 人参 ごんぼう 馬芋 おろし	ぬかづけ 梅 沢あん
	昼	同上	同上	ぬかづけ 沢あん
	夕	すいとん 小麦粉1.5合 もろこし粉1.5合	味ソ汁 大根 人参 ごんぼう 馬芋 ねぎ	同上
9	朝	麦豆飯 米3合 麦1合 グリンピース2合	味ソ汁 大根 人参 ごんぼう 馬芋 ねぎ	ぬかづけ 梅 沢あん
	昼		同上 おろし	ぬかづけ 沢あん
	夕	すいとん 小麦粉1.5合 もろこし粉1.5合	大根 ねぎ 馬芋 人参 ごんぼう	同上
10	朝	豆飯 米3合 グリンピース3合	味ソ汁 大根 同葉 人参 ごんぼう 馬芋 ねぎ	ぬかづけ 梅沢あん
	昼	同上	同上 おろし	ぬかづけ
	夕	すいとん 小麦粉1合 もろこし粉2合	味ソ汁 大根 同葉 馬芋 ごんぼう ねぎ ふき	沢あん ぬかづけ
11	朝	豆飯 米4合 グリンピース2合	味ソ汁 大根 同葉 ごんぼう 馬芋 ねぎ	ぬかづけ 梅
	昼	同上	同上 みょうが	ぬかづけ
	夕	すいとん 小麦粉1合 もろこし粉2合	味ソ汁 大根 同葉 人参 ごんぼう 馬芋 ねぎ	ぬかづけ たくあん
12	朝	豆飯 米4合 グリンピース2合	味ソ汁 大根 同葉 ごんぼう 馬芋 ねぎ す1たし	ぬかづけ 沢あん 梅あおづけ
	昼	同上	同上	同上
	夕	すいとん 小麦粉1合 もろこし粉2合	味ソ汁 大根 葉ねぎ 馬芋 ごんぼう	同上
13	朝	豆飯 米2合 グリンピース2合	味ソ汁 大根葉	ぬかづけ 沢あん 梅 あおづけ
	昼	同上	同上 おろし	同上
	夕	すいとん 小麦粉1合 もろこし粉2合	味ソ汁 大根 同葉 ねぎ 馬芋 ごんぼう	同上
14 マメコ	朝	豆米飯 グリーン四合 ピース2合〔ママ〕	味ソ汁 大根 同葉 ごんぼう 馬芋 ねぎ 魚肉	梅ぬかづけ 沢あん青づけ
	昼	同上	同上	ぬかづけ たくあん 青づけ
		すいとん 小麦粉1合 もろこし粉2合	味ソ汁 大根 同葉 ごんぼう 馬芋 ねぎ	同上
15	朝	豆飯 米四合 グリンピース2合	味ソ汁 大根 同葉 ごんぼう 馬芋 ねぎ	梅ぬかづけ 沢あん 青づけ
	昼	同上	同上 おろし	ぬかづけ 沢あん 青づけ {コブツクダニ}
	夕	すいとん 小麦粉1合 もろこし粉2合 マメ粉1合	味ソ汁 大根 同葉 馬芋 ねぎ ごんぼう	同上

16	朝	豆飯 米四合 グリンピース2合	味ソ汁 大根 同葉 ごんぼう 馬芋 ねぎ	梅ぬかづけ 沢あん 青づけ
	昼	同上	同上 みょうが	ぬかづけ 沢あん 青づけ
	夕	すいとん 小麦粉1合 もろこし粉2合	味ソ汁 大根 同葉 人参 ごんぼう 馬芋 ねぎ	同上 魚のひらき 梅ぬかづけ 沢あん
17	朝	豆飯 米4合 グリンピース2合	味ソ汁 人参 ごんぼう ねぎ 馬芋	梅ぬかづけ 沢あん 青づけ魚肉
	昼	同上	同上	ぬかづけ 沢あん 青づけ魚肉
	夕	すいとん 小麦粉1合 もろこし粉2合	味ソ汁 玉ねぎ 馬芋 人参 ごんぼう	同上
18	朝	豆飯 米4合 グリンピース2合	味ソ汁 玉ねぎ 馬芋 人参 ごんぼう	梅ぬかづけ 沢あん 青づけ
	昼	同上	同上	ぬかづけ 沢あん あをづけ魚肉
	夕	すいとん 小麦粉1合 もろこし粉2合	味ソ汁 馬芋 人参 玉ねぎ	ぬかづけ 沢あん あをづけ
19 スープ	朝	豆飯 米4合 グリンピース2合	ナシ トロロ芋	ぬかづけ 沢あん あをづけ
	昼	同上	ナシ 魚ひらき	梅ぬかづけ 沢あん あをづけ
	夕	すいとん 小麦粉1合 もろこし粉1合 豆粉1合	スープ 味ソ汁 白菜 馬芋 人参 玉ねぎ	ぬかづけ 沢あん 青づけ
20	朝	豆飯 米4合 グリンピース2合	スープ汁小サジ1 馬芋 白菜 人参 玉ねぎ	梅ぬかづけ 沢あん 青づけ
	昼	同上	同上 魚ひらき	ぬかづけ 沢あん 青づけ
	夕	すいとん 小麦粉1合 もろこし粉1合 豆粉1合	スープサジ1 馬芋 人参 カンラン 玉ねぎ ハクサイ	同上
◎ 21 (佛ノ日)	朝	ぼたもち 米5合 グリンピース1.5合 キナコ	スープ汁 白菜 人参 馬芋 玉ねぎ	梅 沢あん ぬかづけ 青づけ
	昼	同上	同上 キヤベツ（正ゆ）	沢あん ぬかづけ あおづけ
	夕	すいとん 小麦粉1合 豆粉1合 もろこし粉1合	スープ汁 白菜 人参 玉ねぎ 馬芋 ごんぼう	沢あん すこんぶ ぬかづけ

22 グリーンピース パンムギ	朝	豆飯 米4合 グリンピース2合	スープ汁 白菜 人参 玉ねぎ 馬芋 ごんぼう	ぬかづけ {すこんぶ} 梅
	昼	同上 (うすやき) コムギコ モロコシコ マメコ 各1合ツツ	同上 キヤベツ (塩)	ぬかづけ
	夕	すいとん 小麦コ1合 豆コ1合 もろこしコ1合	スープ汁 [ママ] 白菜 菜人参 あおやぎ 馬芋 玉ねぎ ごんぼう	ぬかづけ
23 魚	朝	パン 1斤	スープ汁 白菜 菜人参 ごんぼう 馬芋 玉ねぎ	梅ぬかづけ
	昼	豆麦飯 米3合 麦1合 グリンピース2合	同上 (みょうがこま切)	ぬかづけ 味ソづけ
	夕	同上	同上 (きやべつこま切) (粉ソレゾレ 0.3合)	同上 {煮物大根}
24	朝	パン 1斤	スープ汁 白菜 菜人参 ごんぼう 馬芋 玉ねぎ	ぬかづけ魚 沢あん 味ソづけ
	昼	豆麦飯 米2合 麦1合 グリンピース3合	同上 (ねぎこま切正油)	同上 魚
	夕	同上	キヤベツこま切 (汁ナシ)	同上 魚
25 お店から 菜いただく	朝	豆麦飯 米2合 麦1合 グリンピース3合	スープ汁 白菜 人参 ごんぼう ねぎ 馬芋	梅ぬかづけ 沢あん 味ソづけ
	昼	同上	同上 (おろし)	ぬかづけ 沢あん 味ソづけ
	夕	すいとん 小ムギコ1 もろこし1	味ソスープ汁 菜	同上
26 洗カンパケツ 正油	朝	豆麦飯 米2合 麦1合 グリンピース3合	スープ汁 菜	梅ぬかづけ 沢あん 味ソづけ
	昼	同上	同上 (キヤベツ)	ぬかづけ 沢あん 味そづけ
	夕	すいとん 小麦コ1合 もろこしコ1合 マメコ 1合	スープ汁 菜	同上 青づけ
27	朝	豆麦飯 米2合 麦1合 グリンピース3合	スープ汁 菜	梅ぬかづけ 沢あん 味ソづけ 青づけ
	昼	同上	同上 (キヤベツ)	ぬかづけ 沢あん 味ソづけ 青づけ
	夕	すいとん 小麦コ1合 もろこしコ1合 マメコ1合	スープ汁 菜	同上

28 豆粉2 もろこし粉 9	朝	豆麦飯 米2合 麦1合 グリンピース3合	スープ汁 菜	梅ぬかづけ 沢あん 味噌づけ 青づけ
	昼	同上	同上（キヤベツ）	ぬかづけ 沢あん 味噌づけ 青づけ
	夕	すいとん 小麦コ1合 もろこしコ1合 コメコ1合 グリンピース0.8合	スープ汁 菜	同上
29 いわし	朝	すいとん 小ムギコ1.5合 もろこしコ1.5合 マメコ1.5合 グリンピース1合	スープ汁 菜	梅ぬかづけ 沢あん 青づけ 味噌づけ
	昼	同上 うすやき もろこしコ マメ各1合	同上（キヤベツ）	ぬかづけ 沢あん 青づけ
	夕	豆麦飯 米1合 麦0.5合 グリンピース1.5合	スープ汁 菜 ごんぼう 馬芋 人参 玉ねぎ 干したら	同上
30 魚 大根	朝	すいとん 小麦コ1合 もろこしコ2合 マメコ2合	スープ汁 菜 干ガブ（いわし）	梅 ぬかづけ 沢あん 青づけ
	昼	同上	同上 おろし みょうが	ぬかづけ 沢あん 青づけ
	夕	御飯 米1合 麦0.5合 グリンピース1.5合	おろし みょうが いわし	同上
31 塩	朝	すいとん 小麦コ1合 もろこしコ3合 マメコ2.5合	スープ汁 大根 菜（いわし）	梅ぬかづけ 沢あん 青づけ
	昼	同上	同上 おろし	ぬかづけ 沢あん 青づけ
	夕	御飯 米1合 ムギ0.5合 グリンピース1.5合	スープ汁 大根葉 馬芋 ごんぼう 人参 ねぎ（いわし）	同上 {わらび煮}

〔以下略〕

〔備考：記載内容は原文表記のままとした。ただし、原資料は文字を詰めて書かれており、吉崎が適宜スペース・改行等を施して体裁を変更した。また、記載内容は項目ごとに明確に分かれていない部分があり、吉崎が各項に入れる内容を調整した箇所もある。〕

横浜都市発展記念館紀要 第17号

2022(令和4)年3月31日発行

編 集	横浜都市発展記念館 〒231-0021 横浜市中区日本大通12 TEL 045-663-2424 FAX 045-663-2453
発行	公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
装 幀	木 村 寛
印刷・製本	株式会社佐藤印刷所
